



花まつり法要 稚児おねり

と き 平成19年4月8日(日)

花まつり 法要会場 瑞光寺 新潟市西堀通3

pm1時～1:40分

法要に引き続き お稚児さまの「おねり」古町通5～灌仏会場まで(大和デパート前)

記念講演 講師 廣澤憲隆師 pm3時～

講演会場 ホテルイタリア軒5F 朝日の間

古町通7大和デパート前にて **灌仏会** am10～pm3時まで

甘茶をおかけし お祝いしましょう

主催

新潟仏教会

花まつり (灌仏会)

考えてみますと、わたしたち一人ひとは実に尊い存在です。たとえば私がこの世に生を受けたのは両親がいてくれたからです。その両親は四人の祖父母によって生まれました。このようにして三十代前までさかのぼってみますと十億七千万人もの大勢のご先祖さま方がいたこととなります。

そのうち一人でもいなければ現在の「わたし」は存在していません。

わたしたちは永遠の過去から綿々とつづいている生命の流れの最先端に今、生きているのです。

そして大いなる大宇宙の中の地球という星に生まれた私達は、豊かな自然に恵まれた日本という国で社会を作り、お互いに支えあい助けあって暮らしています。

お年寄りから赤ちゃんまで、だれもたった一度の人生を歩む大切な社会の構成員なのです。そんな尊い自分を実感し、この世に生き生かされていることへの喜びの声

「唯我独尊」です。四月八日はお釈迦さまの誕生を、お祝いしますとともに命あるものすべての存在を尊ぶ日です。

「今、求められるもの」

新潟仏教会会長 瑞光寺 桑原大宗



この度、皆様のご推薦を賜って、会長職を拝命いたす事となりました。

昨年の世相を現す字は、いみじくも「命」でありました。授かる命、尽きる命、絶たれる命。

私達僧侶はその命の終わりに立ち会う者ではありませんが、死を通して逆に見えてくる命の尊さに心打たれる時が多々あります。

不本意に命を絶たれる事ほど無残なことはありません。昨近の理不尽な命の喪失の頻発に、社会がゆがみ始めていると感ずる諸氏は多いと思います。

世の荒(すさ)びは人の心の荒廃でもあり、こんな時こそしっかりとした信仰心が必要なのだろうと思われ、我々仏道に帰依する者がその心を伝えていかなければならない時だと思えます。

特に若い人たちにどうしたら仏様の教えを伝える事が出来るか、この事を私達は真剣に考えなくてはなりません。

その為には伝統ある仏教の根本について自らの意識を高め、相互啓発の交流を図り、それを一般の皆様にも

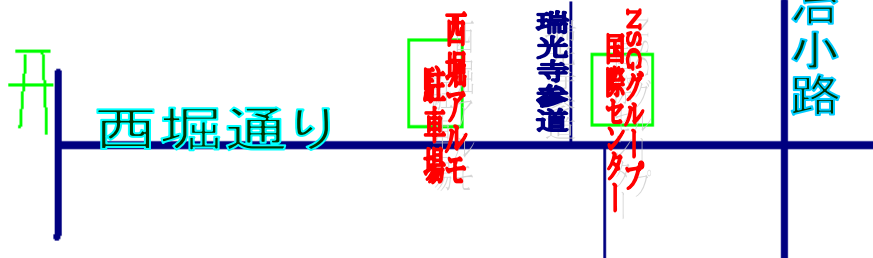
広めることが急務です。そうした事を念頭に置くと、私の第一の使命は活発な交流を図る先導役となり、また世話役とならねばならぬと考えております。ここに皆様のご協力を中心よりお願い申し上げます。就任のご挨拶とさせていただきます。

花まつり会場ご案内

鍛冶小路



花まつり会場(瑞光寺)



記念講演

演題

「お釈迦さまの 生老病死」

通夜は人生の卒業式
葬式は浄土の入学式

講師紹介

瑞林寺 住職

廣澤 憲隆師



昭和十三年（一九三八）生まれ

大谷大学大学院修士課程終了

真宗仏光寺派瑞林寺住職

真宗仏光寺派本山総務

新潟親鸞学会副会長

著書 「帰命のこころ」

共著 「新潟の仏事」

「南無の大地」



昨年勝桑寺さまで行われた「花まつり法要」のひととき

編集後記

お釈迦様は降誕会、私は誕生日、すべてに誕生日があります。生きていくからには、生まれたことは分かれます、祝福されて生まれてきたのです。

二十歳なら二十年生きてきた事は事実です、「何故、今、私がここに生きているのか」と考えなくとも生きています。ただその不思議に気づいたとき「信ずる」という修行を通して、お遍路やお念仏、坐禅等、個々の体験を通して、たとえば、数学のように答えがあるのと違い、答えられないことを、知っていくことが「信ずる」という力だと、真宗大谷派教学研究員であられる梶原敬一さんの「信ずる」というお話を、ある雑誌でみつけました。

私たちが日々の生活の中で、苦しみや、悩みの中で、自分自身を見失っている、生きていくことに気づくことが自分を知り、その気づきが、私「が」生きるという、私という存在に固執した生き方を変えて、私「を」生きるという生き方に気づいてみたい。信ずるとは、目覚めた私を見出すこと、花まつりを通して、生まれた不思議を考えてみませんか、どうぞ、花まつり法要と講演においでください。

高道記